台湾旅行とみこうみ（二）

塩月佐一
（会員・佐伯市匠南）

今回は少しまとまったことを書いてみたい。

霧社（仁愛郷霧社）

霧社と聞けば反射的にかつての霧社事件を思い出す。

霧社のある台中州能高郡（南投県仁愛郷）は、能高山（三三四七m）の西麓一帯で、全郡山また山で蕃地が大部分を占めている。高峻な中央山脈に住む蕃人（高山蕃という）達は、外敵に備えて、けわしい山で山頂が比較的なだらかな山を見つけ、同種族のみの集落で住む。これが蕃社である。霧社もこの例外ではない。

霧社は東に能高山、北に苛茉主山（三五五九m）・合観山（三四一一m）南には千卓万山（三三〇四m）等の高峰をめぐらし、台湾十二景勝地の一とされる所で、この附近一帯の中心地である。ここで台湾理蕃史上最大の蕃人暴動事件が起きた。

昭和五年十月二十七日、この日霧社公学校で運動会があった。（小学校は日本人、公学校は台湾人・蕃人が通う。霧社公学校は蕃人のみ）この日は特に能高郡守（郡長）・郡視学や警察官・日本人有志も多数招待されて臨席していた。終了後は恒例の懇親会があり、郡守も視学等も宿泊していた。霧社はこの地方の中心地で日本人の官吏も居住していた。

この夜、一発の銃声を合図に蕃人が銃をかまえ、あるいは蕃刀を振りかざし、日本人住宅を襲った。郡守・校長・教師・警官・婦女子に至るまで一三四人の日本人は全員斬殺された。他に台湾人二名が殺された。郡視学Kは奇跡的に唯一人かろうじて難を逃れ、二三km程離れた

甫里にたどりつき、事件の第一報を入れた。余話になるが、このK視学は酒がまわると時々この時の話を聞かせてくれた。

蕃人は極秘のうちに周到な計画をたてていた。マエボ社の頭目モーナルダオを中心としてボアルン・ホーゴー・スーク・タロワン・ロードフの六蕃社の数百人[注1]が蜂起し、先ず各蕃社の巡査駐在所を襲い、鉄砲・弾薬を奪い、電話線を切断して霧社の日本人を襲った。首領モーナルダオは六尺豊な大男で、日本にも選ばれて来たことがあり、人徳があった。

頭目の娘(後列右2人)日月潭の店先にて

急報をうけた警察は、直ちに警察隊を派遣したがなすすべもなく、事の重大さに驚き、急拠増員すると共に、軍隊の派遣を要請した。

先ず他蕃社への波及を断つため包囲網を敷くと共に、他の蕃社を説得し静観を求め、鎮圧にかかった。

高山蕃は中央山脈の高地に住み、狩猟と焼畑農業によって生活し、峨々たる峻峰・層々たる巨巌を、鳥の如く猿(ましら)の如く駆けめぐり、あるいはジャングルに潜み、警察から借りた銃で、一発必中獲物をねらう射撃の名手達である。地理に精通する彼等は岩にかくれ、ジャングルに潜み、十分に近づけて一発必中を期している。

二十九日台湾守備隊はついに「凶蕃討伐令」を発動し、飛行機・山砲・機関銃・催涙ガスを装備し徹底討滅を期し、凶蕃の完全包囲網をジリジリとちぢめ、糧道の補給を完全に遮断した。

蕃人が一発発射すると直ちに集中砲火を浴びせた。まるで日本兵に対するあの米軍のように。

こうして一か月、さすがの番人も食糧・弾薬は完全に

尽き、やせ衰えた姿で投降して来た。彼等は一発の銃弾は勿論、一粒の食糧すらなかったという。

主謀者モーナルダオは「人目のつく所では死なぬ」と山岳の奥深く姿をかくした。日本軍は行方を捜したがその行方はわからなかった。後日蕃人によって遺骨が発見されたが、中央山脈の奥深く蕃人もよりつかない岩山の上であったという。

高砂族の老女（霧社にて）

それにしてもなぜ蕃人は暴動を起こしたのだろうか。原因はいろいろ考えられるが、直接的な理由として、現地警官の強制労役などによる無法な収奪、賃金支払の遅延、高砂族婦女に対する非行、蕃人に対する極度の社会的・経済的差別待遇などに対する、憤りの爆発とみられているが、根本的には台湾統治以来、蕃人の性情・習慣を無視した、警察政治による理蕃政策の失敗といわれている。

事件処理も一段落した翌年一月、台湾総督石塚英蔵以下関係官吏の罷免をみ、第五十九回帝国議会では貴族院・衆議院の両院で責任が激しく追求された。

政府はこの対策として理蕃費三十三万円を追加予算に計上し、撫育授産費若干増加しただけで、警備強化をし事態をつくろい、日本統治以来最大の蕃人暴動に結末をつけた。

ここで蕃人（高砂族）について若干の補足をしたい。

いうまでもなく蕃人は台湾の原住民である。漢民族が台湾の対岸、福建省から移住をはじめたのは明朝末期からで、次第に原住民を圧迫し、中央高地に追い込み、台湾の主人公となった。

蕃人は十種族でおよそ三十族あまりに分かれている。おもしろいことに三十族みな言葉が違うので、共通語と

して今日でも日本語が使われている。中央山脈に住む者を高山蕃、主として東部平地（花連・台東）に住む者を熟蕃と呼ぶ。熟蕃はだいぶん漢民族化して来ている。

生蕃・蕃人は清国時代からの呼称であるが、霧社事件後は高砂族と呼んだ。高砂族義勇隊の名は我々日本人の記憶に新しい。中華民国になり、日本時代の呼称を除去する様々な試みがなされ、現在では高山族とか山地同胞とか呼ばれている。

反乱蕃人の墓（霧社）

高山蕃は純朴であるが一面首狩り（出草）以来の荒々しい気性を持ち勇猛果敢である。昭和七年私が花蓮港に行った時も、「能高蕃が下って来ているというから決して山に入るな」と注意された事があった。

霧社事件をおこしたタイヤル族（アタヤル族）は特に荒々しいと言われていた。

今日では高山族も日本時代以来の低地移住政策が進められ、山麓への移住が進んでいる。前号で報告した梨山の梨・桃栽培もその一例である。経済的には本省人とは競争ができないので、今日でも蕃地政策がとられ、一般人の定住は禁止されている。

現在の若者には、もう昔日の蕃人の面影はない。服装も我々と同じで、女性は美しく化粧もしている人も多い。昔の服装は観光地の写真商売用だけである。

私は昨年十二月二十九日、日月潭観光の後霧社を訪れた。日月潭より三三㎞で世界的蝶の名産地甫里に着き、更に二三㎞で霧社に着く。こう書けば簡単だが、日月潭がすでに水社大山（二〇五六m）の山麓にあり、完全舗装道路だがそれから更に山奥の道である。

甫里を出た車は四〇分余りして突然峻嶮な山が眼前に迫まる「人止めの関」に着く。山にはつづら折りの道が

山上まで続いている。この道を上ると霧社だという。高山蕃は人を寄せつけないけわしい山で、しかも頂上に人の住めるような山をみつけ、敵から身を守る絶好の場所に蕃社をつくるということを、始めてこの目で確めることができた。

集落に入ると走り出た二人の若者に停車を命じられた。白棟樑君が証明書を見せるとすぐOKした。下車すると寒さが身にしみる。そばに標高一二四八mの標識が立っている。寒いはずだ。

墓の後の銅壁画（霧社）

少し歩くと霧社事件記念塔がある。大きな塔の後に「莫那魚日道烈士之墓」と刻まれた立派な墓があり、その後にモーナルダオと思われる人物が決起を説くものと、歓声をあげるものの二枚の金属の大壁画がある。私はしみじみと時の流れを感じた。ここで死んだ日本人が哀れに思われた。日本時代の凶蕃は今日では烈士として賞讃されている。日本でも藩政時代の百姓一揆の主謀者達は、今日では義民と呼ばれている。政治は残酷である。

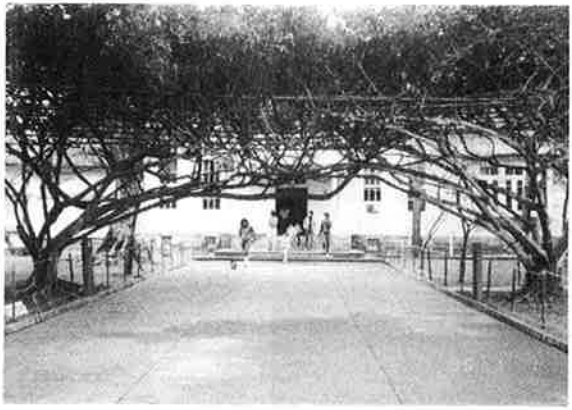
霧社事件の跡をたずねて見学したい所はたくさんあったが、あまりにも寒いので、旅先で風邪でも引いたら大変だと思い、あきらめて早々に車に乗りこんだ。乗車する時蕃人の老婆が歩いていたので急いでシャッターを切った。

霧社事件について書きたいことはまだまだあるが、長くなったのでペンをおく。

角板山

台湾の中心地、台北市に近い蕃地として、早くから有名な所は烏来（うらい）と角板山である。烏来は温泉地として、角板山は台湾十二景勝地の一として、また大正十二年皇太子殿下行啓地として今日では観光地となっている。

角板山は六三〇mの山上にある眺めのよい蕃社である。山上には大正十二年四月十六日皇太子殿下台湾行啓の折りの立派な御泊所が設けられている。今日でこそ山上までバスが通っているが、当時は大渓から山麓まで台車（トロッコ）、山上までは細い道が通っているだけだった。台湾総督府は急きょ道路を拡幅し、牛車と人力で大変苦労をして資料を山上に運び上げ、しょうしゃな和洋折衷の御宿泊所を建築した。大正十四年に秩父宮殿下も御宿泊になった。その後来台された皇族方もよくお泊りになったという。



行啓記念館の正門

植民地時代とは言え、交通不便なこの山上に、僅か二泊の御休息のためにこのような立派な建築をしたことに、驚きとむなしさを感じた。

戦後は蔣介石総統の別荘として使用され、現在は中正記念館として保存されている。

中央玄関を入ると正面に蔣総統の大きな写真を掲げている。中に入ると皇太子殿下が使用された調度が、すべて昔のまゝに保存されている。思ったよりも質素なものであったが、総統が日帝のものをそのまゝ使用されたと書いてある。日本人

記念館前庭の梅林

としては屈辱を感じ、そこそこに外に出た。

前庭の梅林には、もうちらほら花が咲いて何だかなつかしかった。石垣の下の山には野生のポインセチア（猩々木）が咲乱れていたが、台湾ではありふれた木なので私達の外は誰も目をとめる者はいなかった。眼下には石門水庫（石門ダム）の一部が見える。晴れていれば玉峰山（二五八九m）等の山山が眺められるはずだがあいにくの曇り空、記念堂をとりまいて大きな樹木が茂っているが、その中に美しく紅葉したもみじが一本あった。

慈湖

広場の前に駐在所があり、入口の上に「慶祝元旦」と赤地に白字で染抜いた大きな横幕が張ってあった。台湾に来てすっかり忘れていたが正月かと気がついた。台湾の人々は旧正を祝うので新正は官庁の形ばかりのものである。

ここの駐在所は、案内してくれた黄福全君の管下で入ってお茶をいただいた。

駐在所の後方には蕃社がある。やはりまだ粗末な家が多い。正月休日で観光客がだんだん多くなって来たので下山した。三十一日から二日まで休日だという。

中正廟

角板山山麓に中正廟がある。黄君の計いで参拝することにした。

広い駐車場に車を置いて、しばらく行くと憲兵が立哨している。警察署長の黄君が名刺を出して許可を受けていると言うが、なかなか通してくれない。○○に確かめてくれと言うと電話してようやくOKが出た。

ユーカリ樹の美しい広い参道に五〇mおき位に憲兵が立哨しているし、参道の両側には青天白日旗が一〇mおきぐらいに立ち並んで、一種の異様な雰囲気をかもし出

している。しばらくして右側に雨後の霧がうすく立ちこめる湖があり、白鳥が数羽ずつ群をなして遊泳している。ポインセチアなどいろいろな花の咲く竹やぶの岸辺をつついている離れ鳥もいる。あまり美しいのでしばらく眺めた。蔣介石総統が故郷の風景に似ているというのでここに廟（墓）を定め、母堂の慈徳を偲び慈湖と名づけたという。

中正廟

参拝帰りの人に時々出合う。少し前方に新しい台湾風（中国風）家屋が見える。蔣総統の廟という。おそらく総統の生家を模して建てられたものであろう。私はこの度の台湾旅行中、なつかしい昔風の台湾家屋を写真にとりたいと心掛けていたが、田舎でも見かけなかったものを思いがけなくここで写真に収めることができた。

待合室は装飾もなく、椅子も質素なものであった。二、三分待つと呼ばれて中に入る。室の中央にきれいに磨き出された大きな黒みかげが安置されている。この前に一列に整列すると係官の号令（北京語）で三礼して退出する。室内を眺め回す余猶はなかったが、ここも飾り気がなく質素だった。ただ大きな大理石だけが目の前にあった。高さ一・三m巾九〇cm奥行き二m位だろうか。

前庭の芝生の中に「世界一之韻石」と書いた円い韻石があった。中国大陸から持って来たものだろう。

・注1　三〇〇人・五〇〇人・一〇〇〇人と書物によってまちまち。

・参考資料

1　高砂族に捧ける　鈴木　明　中公文庫
2　世界大百科辞典　平凡社刊
3　日本歴史大辞典　河出書房新社刊
4　台湾（旅行案内）　実業之日本社刊
5　その他